

入選

無駄な親切はない

愛媛県 松前中学校 三年

亀岡 夕月

小学生のとき、私の隣の席の子が足をケガして不便そうな日々を送っていた。あまり話さない、親しくない子だった。隣に座っているので、立とうとしているのに立てないという場面をよく見た。私はそのたびに、立ちやすいようにと、その子の椅子を引いたりした。不器用な私の親切のつもりだった。

しかし、その子は何も言わないので、「空回りしたのかな」とか「気づいていないのかな」と思ったりした。そのたび、自分の行動を見直したが、少しずつ面倒だと思っていった。しかし、その子の危なっかしい行動を見ると、「何か手伝わないと」と思った。その子が不便を感じている間は、そんな日が続いた。

ある昼休み、私は今すぐにでも読みたい本を持っていた。昼休み全部使えば、10ページくらいは進む。授業前後の休みではまったく進まなかったこともあり、その昼休みを私は楽しみにしていた。クラスのみんなは、チャイムと同時に外へ出ていった。

教室には私と、外で遊べない隣の席の子の二人になった。その子は隣で読書する私に話しかけてきたので、私はしぶしぶ本を閉じた。その子は、友達が外に行ってさびしいと言う。素直にそういうことが言えることへの尊敬と、親切は空回りだったのか、という二つの気持ちがわいた。

そして、浅い話をした後、昼休みの終わりのチャイムが鳴った。その後、私はその子にした親切についてのお礼を言われた。先ほどまでは「本を読めばよかった」と思っていたが、どうでもよくなっていた。私は嬉しくなって、「いいんだよ」と言った。その子が「ありがとう」と言おうとしてくれていたあの昼休みは、本の10ページ分より価値のあるものだと思う。その昼休みを、私が本の内容より覚えていることが、何よりの証拠だろう。

その後、その子の足のケガが治り、私たちは話さなくなった。これはひどいとかではなく、自然なことだ。ケガによって生まれた不便を、私が少し助けることで成り立つ関係なのだから。それに、話さなくなったからといって、私がした親切が無駄になったとは思わない。少なくともあの昼休みは、小さな親切から生まれた、本より価値ある時間だった。

私は、この体験からいらない親切はない、と思った。そして、それを証明するのは、「ありがとう」などのお礼の言葉だと思う。小さなことでも誰かのために積極的に行動したり、小さな親切にも気づきお礼を言えたりする、そんな人間に私はなりたい。